
僕の人生、君の希望

陸たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の人生、君の希望

【Nコード】

N5050I

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

暴君に支配されるとある国。王城の兵士を勤める彼の日常は、終わる日が来るのだろうか。

成績はよかった。

学校を卒業したその時、僕は推薦されて王城の兵士になった。
別に立派な志があったわけじゃなく、給料がよかったからだ。

そしてそのまま僕は今も、人々の不満を一身に受けた王の駒なんて
いう仕事をしている。

この国の王は、とんでもない暴君だ。

父王をその手につけて王座に着くと、友好関係にあった隣国に戦争を
ふっかけ、税を吊り上げた。

贅の限りをつくし、自分が世界の支配者になるのだと信じているよ
うな愚か者だった。

それでも彼が今も王位にあるのは、力があるからだ。

権力、カリスマ性、支配力。

その悪魔の力に魅入られている人間も多い。

おとぎ話の世界なら、どこから勇者が現れて世界に平和を取り戻
してくれる。

けれどもここは物語の世界じゃなく、血なまぐさい現実で、もう何
人もの勇者を目指した人間が死んでいった。

人々の瞳から、光が失われていく。

それでも僕は自分の身を守るためにこの仕事を辞められない。
誰もが自分の命のために、王に逆らうことを止めた。

今日も出掛けに友人と言い争いをした。

僕の友人は王の支持者ではない。

もちろん普通の人は誰でもそうだろうけど、彼女は少し過激だった。

彼女は王を守る兵士の仕事に行く事はないと言う。

王に立ち向かえと。泣き寝入りをする民衆も悪いのだと。

けれどもそれはただの理想論で、そんな立派な志を持ちながらも殺された人間を、僕は何人も知っている。

実際彼女の友人は彼女から離れ始めていたし、軍に目をつけられてもいた。

捕まるから自重しろと僕は言い、彼女はさらに王への批判をまくしたてる。

最近毎朝のようにこれが繰り返される。

僕は正直うんざりしていた。

兵士の仕事を辞めることですら、今は王への反抗と見なされる。

僕は死にたくはない。

でも彼女はそれを受け入れられない。

僕らの意見はいつも平行線を辿るままなのだ。

彼女の罵倒に送られて、僕は毎日城へ行く。

僕の割り当ては王の間へと続く階段の1階部分だ。
重要な役回りである。

僕の他に隊長も一緒だ。

隊長は異常なまでの王の信奉者だ。

逆らう奴を殺すことを生きがいに行っている。

そして僕がいつも隊長と組まされるのは、人殺しを嫌う僕を、いつでもみせしめの為に殺せるようにしておく為だった。

少し前までは毎日のように王への批判を携えた人々がやって来ていた。

けれども見せしめの為続けられる処刑に、すぐに城を訪れる人はいなくなった。

恐怖政治。

もう誰も王に対する批判を口に出来ない。

王は確かにうまくやっている。

けれどそれも、いつかは終わる。

「王を玉座から引きずり降ろすのよ」

今朝、彼女は僕にそう言った。

僕の知らぬ間に彼女はある組織に入ったらしい。

その組織の目的は、この恐怖政治を終わらせること、新しい政治制度を作ることだった。

その為に武器を集めているんだと彼女は言う。
いつか城を襲撃すると。

危険だと僕は言った。

成功する可能性は低い。

城を固める兵士は皆、戦闘のプロで人を殺す事が大好きな最低の人間だ。

けれども彼女は聞き入れてはくれなかった。

襲撃に巻き込まれると危険だから城に行かないでと言っただけだ。

あの言い方からすると、襲撃の日は近いんだろう。

無理だと僕は思う。

今まで、たくさんの人間が志半ばで死んでいったのを見てきた。

王を殺すなんて無理だ。

危険だと言ったが、彼女はきつとその襲撃に参加するんだろう。

………彼女は死ぬ。

王に逆らって無事な人間はいない。

そして僕は友達を助けたくても助けられない。

死なせたたくない。

逆らえない。

死なせたたくない。

逆らえない。

僕はただの臆病者だ。

「何だ？」

隊長の声にはっとなって顔をあげた。

何かの爆発音。

こげくさい火薬の匂い。

遠くから伝わる怒声。

「隊長！」

兵士が報告に来る。

やはりそうだ。

彼女たちだ。

迫ってくる。

いつにない緊張感だった。

死にに来る。

彼女は殺されに来る。

この僕が剣を抜かずにはいられないと知っていて。

僕らの前に現れた時、彼女達は5人しかいなかった。
ぼろぼろになりながらも、彼らの目には希望があった。

怖くはないのだろうか。

あの王に刃向かって。

逃げ場はないのに。

どうして。

「おい、行くぞ」

隊長が剣を抜く。

僕も反射的に剣を抜いた。

「通してはくれませんか」

彼女が悲しそうに目を伏せる。

他人として僕に接している。

それはもしかしたら、僕を巻き込まないために。

その前に剣を構えた男が立った。

姫を守る勇者みたいだ。

僕は状況も忘れてそんな馬鹿なことを思った。

「馬鹿なことを」

隊長が口元に残忍な笑みを浮かべる。
腰を屈めた。

僕は、また希望を潰すのか。

ガキンと辺りに剣のぶつかる音が響いた。

「貴様…！」

隊長の地を這うような声が冷たく響く。

それは僕の背中を冷たくした。

けれど僕は無理矢理口元に笑みを浮かべてみせる。

体の震えを押さえて、腕に力を込めて剣を払う。

隊長が態勢を崩して膝をついた。

「早く行け！」

自分でも久しぶりに聞いた僕の大声は、気持ちいいほどに辺りに響き渡った。

隊長が血走った目で僕を睨みつける。

次の標的は僕。

僕は勇者にはなれなかった。

それでも、僕は最後に。

「すまない！」

勇者だと思った男が階段を駆け上がる。

「ありがとう！」

1人2人と階段を駆けける音が続く。

僕は、最後に。

残り1人の足音がいつまでも聞こえなかった。

それが誰だかわかっていた。

でも隊長に隙を見せる訳にはいかなくて、僕は振り向かない。

やがて背後から聞きなれた声がした。

「死なないで」

それから階段を駆け上がる音。

僕は口元に笑みを浮かべた。

最後に、自分を誇りに思える。

僕は剣を構えると、隊長に向かって地を蹴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5050i/>

僕の人生、君の希望

2010年10月21日20時09分発行